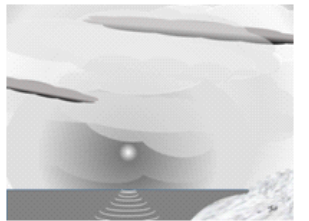


小説

地球遺産物語

時の畔で

稲瀬 隆



八月二四日曇り。気温一二度。湿度六二%、北北西の風、風力二。

また今日も曇り。夏も終わりだというのに、三月並みの寒さだ。渡部理は彼方を見やった。丘の頂に開けた公園は風通しが良く、数キロ先に海原が見える。太陽は水平線のだいぶ上にあっても直視できるほどに弱々しく、輪郭はおぼろげでまぶしさが無い。上空を見渡す。低空にはちぎれ雲がわずかに浮いているだけなのに、高空は、生成りの薄布が幾重もたなびくかのように曇っている。夏空の色は見えない。昨日も、一昨日も、先週も、先月もずっとこんな空だった。平年なら朝方でも二三、四度はあって、日中の最高気温は三〇度を下らない。晴れていれば入道雲の周

囲には抜けるほどの瑠璃色があるだろう。

エアサンプラーのホルダーを開け、フィルターをピンセットでつまみ出す。スマホにつけたセンサーを当てると、ゲームのような電子音が放射線の感知を知らせた。およそ二三、〇〇〇ベクレル。重い元素はすでに落ち、ガス状の放射性物質ももうなかるうから、塵からのガンマ線だけでも十分目安にはなる。風向きと丸一日の集塵時間を考えれば、ひと頃よりだいぶマシンになったように思えた。この捕集塵を実験室に持って帰ってスペクトル解析をすれば、核種の推定など、もうすこし詳しい情報リスクの推定ができるだろう。

フィルター交換を済ませ、渡部はザックを担いで丘を下

る。

「苦勞さん」

麓近くまで下りたところで、鍬を持った男たちに声を掛けられた。その足下の、畝の作りが素人くさい何枚かの畑は、似つかわしくない白いアルミフェンスの向こう側だ。

「昨日、今日は大陸からの風だったから、ずいぶん多かつたんじゃない？」

「ええ、端片方面から飛んでくるのもまだ結構ありますからね」

と、少し肩で息をしながら笑顔と会釈を返す。「では、また後ほど」

フェンス沿いにしばらく行くとレンガの門柱があった。そこには今も『NPO法人きぼうの郷・ルリカケス』のプレートがある。オランダの『高齢者村』をモデルとして『ゆたかな自然・あたたかい心』を売りにしたこの高齢者専用特区の中核施設も、食糧事情と医療環境の悪化に伴って職員、住民とも大幅に減った。現段階で残っている三十余名は、ある程度の自立的生活ができて他に行き場がない者、あえてここに残りたかった者たちだけだ。渡部自身は退職後、家族との折り合いが悪くなり、財産を処分してここに辿り着いた。やはり帰るところはない。今ではここで毎日、大気や水、食品の放射能汚染をモニターする役を担っている。以前、有害物質を扱う工場で衛生管理をして

いたことが知れて、引き受ける羽目になったのだ。

あの悲劇の日からこの国は、どこもかしこもひどい放射能汚染だ。次世代を生み育てる若者世代、とくに女性が多少でも安心して住める場所は遠方の離島くらいしかない。その安全さえもいつまで保つかは分からない。世界中が日照不足の低温で海も地も、食料を産み出す力が急速に衰えているからだ。

ルリカケスから五分ほどのところに高等学校がある。連なる山々に不釣り合いなほどモダンな校舎。今は手動となった『自動ドア』をあけると、正面に消えたままの液晶ディスプレイがある。ガラんとした廊下にはまだ、生徒達が走り回っていた頃の人氣が漂っているように思えた。この国で生き延びた若者の多くは、より安全な大気と水と食料が得られる地域に集められ、少なからぬ数が海外へ、とりわけ偏西風を南北異にする南半球へと避難した。それでも危険な汚染大気が流れ込むのは時間の問題といえる。彼らがどこまで生き延び、ちゃんと子孫を生み、育てられるのか、誰にも分からない。

校舎三階の北端に渡部たちの根城、物理実験室がある。太陽光の発電力が弱く、節電のためあつてうす暗い。そんな部屋の片隅で、液晶モニターに照らされている横顔が浮かぶ。数台のPCに囲まれたローレンス・スペクターが、仲間の手作りした小さな固体センサーでスペクトル解析に

挑んでいる。周囲は彼をラリーと呼ぶ。見かけは欧米人だが、日本語が妙に流ちょうだ。IT企業にいた、というがゲームから科学・芸術に至るまで、博識の「オタク」である。

「仙内原発がやられちゃったケド、稼働中じゃなくてヨカッタネ」渡部を振り返る。「ま、稼働中だったとしても、ボクらジジ・ババにはヨードなんかカンケーないヨ、ダ」

渡部は苦笑しながら、ここ数週間、似たような会話を交わしていると思った。県内要所の放射能データは公開されてるはずだが、とにかくここは情報環境が悪い。テレビも電話もウェブ情報もすべてを光で集約化したのが祟った。中核都市のサーバーやアンテナ、一部の人工衛星までもが電磁バルスでやられ、各地で主要なネットワークが寸断された。いま、こんな片田舎のか細い回線からアクセスしても、ラッシュ時の高速道に自転車で乗ろうとするようなものなのだ。

◆ 核の冬

武力による立国を謀った近隣国北蘇が、文字通り“蒸発”したのは今年の早春だった。核ミサイルによる威嚇で隣国を飲み込み、周辺国からは貢納をも得んと画策し、半ばまでは順調に進んでいた。隣国からは「同民族の好（よ

しみ）」を衝いて人道援助を引き出し、その同盟大国の采国に対しては、大阪城の外堀を埋めた家康のごとく、核開発凍結の条件として半島非核化と駐留基地撤廃を求めている。首尾よくそれが成れば、自らは勞せずミツバチを襲って蜜を得る「スズメバチ」の国になれる。いや、あわよくば、突出した武力頼みで大国となったローマ帝国やモンゴル帝国の再来も夢ではない。遠隔での威嚇と管理が可能で現代の統治は、領地に赴く必要もないのだから。

核武力とサイバー攻撃力を持ったスズメバチは、尾を踏む手前でトラを制するつもりだった。だが、一日数百億円の艦隊待機コストと外交スキャンダルでおい詰められていた采国ポーカー大統領は、きっかけを待っていた。「隣国への亡命と財産の保全」も蹴られた王家は逆上、ガム島近海にミサイルを打ちこんだ、つもりだった。だが、季節外れの大型低気圧と偏西風で、飛距離ばかりを誇って精度が甘かったミサイルは、有人島に着弾した。トラだと思った大統領は、ハチノコが好物のクマだったのかもしれない。喜々として天地を覆うほどの最新兵器を繰り出した。メガトン級の核爆弾が三十発近くも炸裂し、数千度に熱せられた大地では、人も木もあらゆる生物は文字通り瞬時に気化し、金属も蒸発、中心部ではコンクリートの建物さえ溶け落ちた。これら全てを飲み込んだ熱球は爆風と共に急激に膨張して、成層圏の彼方までその粉塵を吹き上げた。微細

な固体でできた煙幕は厚く地球を覆い、おそらく数十年は続くであろう「長い冬」を作り出したのだ。温暖化に向かっていたはずの地球は今、一挙に小氷期なみの寒冷に向かっている。

渡部は最新測定データを打ち込んだモニター画面の汚染地図を見つめなおした。この島国は破滅の寸前まで何をしていたのだろうか。

この国はの主要都市や原発に、追い詰められた北蘇から核やBCのミサイルを打ち込まれた。高価なミサイル防衛システムこそあったが、被弾に備えるシステムは『アラート』以外なにもなかった。核が落ちる前日までメディアでは、政治家・芸能人の不倫とグルメが主要なテーマだった。その半年ほど前、核攻撃が現実味を帯びてきた頃でさえ、閣僚は選挙に走り回り、地下街のシェルター化より、国際スポーツ祭の競技場建設が優先されていた。賢い外交力も計画的な防衛力整備もないままに、貴重な時間を無にしたのである。そして絶望的な戦災の後に首相は、友人大統領を弁護して言い放った。

「あの時、叩くしかなかったんです。後回しにすれば、もっと大きな被害が出ていたと、おめいます。みなさん、これが責任ある政治なんです」

渡部とラリーは最新データをノートブックPCに詰め込んで、ルリカケスに向かった。今日は昼食後に、毎週の放射能報告に加え『地球遺産会議』の各班報告がある予定だ。地球遺産会議、それは一人の呟きから始まった。

◆ つぶやき

ことの発端は三ヶ月ほど前。ささやかな酒宴での、こんな呟きだった。

「このままだ滅亡を待つだけなんて、辛すぎる」

これに何人もが深く頷いた。

話の前段はこうだった。

「核の冬は何年も続く」、「現代文明、いやホモ・サピエンスの系譜はここで途絶える」、「それどころか、地上の主要な動植物は絶滅する」、「海でも絶滅の連鎖は続く」、「地球が積み重ねてきた生命の歴史は、振り出しに戻る」

悲観的な見通しばかりが連なっていた。この重く垂れ込めた空気の中で、「辛すぎる」の呟きが漏れた。これに応じるように、看護師の藍沢留美が誰にもなく問いかけた。

「わたしたちが居た、この地球に人類が居た、つてコトを、残せないんでしょうか、この地球のどこかに」

すると一人がつぶやいた。

「オーパーツ」理学療法士の大津だった。

「超古代史のネタかな」ラリーがうつつすら囁った。

「そう、遺跡の発掘や地下工事の時に、ひょっこり出てくる時代に合わない不可解な代物。何万年も前の地層から出てきた『さびてない金属ネジ』とか」
「都市伝説の類いダロウ？」
「それをオレ等が作る。埋める、遺す」すこし酔っている。「わたしたちが、伝説の主役になるのね」藍沢が無邪気に言う。

「わたしたちが埋めたモノを、遠い将来、地上で再び知的文明が栄えたとき、誰かが発見するんだわ」
「そして『彼 or 彼女』はみんなに笑われる。都市伝説ダア、つて」
そうラリーはバカにしたが、大津は

「それでもいいんじゃない。技術的には簡単なコトだし」と引く気がない。

「何万年も残すつて、そんな技術あるかなあ？」と藍沢。

「ああ、あるさ、立派に。だって、ありがたい『原発さま』からのゴミは金属キヤニスターにいられて、最終処分場にしまい込んで『何万年』も漏れ出さないつて。『スゴイ技術』じゃないか」と、大津が皮肉っぽく解説を続ける。「そんなタイムカプセル造つたら、もう何万年も、誰も開けられない。かなり高度の技術文明でなけりやね」

「あ、だめだ。それが開けられるほどの文明になったら、世界のどこかで核廃棄場を開けて、瞬く間に全滅だワ」

藍沢の言葉に、シニカルな笑いが湧く。
オーパーツという語に、渡部は興味を覚えた。いつものクセでメモを取ろうとしたが、紙がない。ポケットを探っていると、隣席から名刺が数枚差し出された。二年前、自動車会社を退職した技師の垣崎努だった。戸惑っていると、「どうぞ裏紙、使つて下さい。今はただのメモ紙ですから」

渡部は礼を言つて、『オーパーツ』『オーバーパック』『オンカロ』・・・と、いま聞きかじつた語を書き留めた。
「じゃあ、宇宙に撒きましようよ。宇宙中に、『きみたちの他にも文明があつたぞー』、つてメッセージ」藍沢は上機嫌だ。

「そりや、大がかりだなあ。ロケットが要るぞ。ロケットが・・・」藍沢たちの熱に、周囲が少しづつまき込まれた。「こつからバイクで二十分くらいのところに、中浦の宇宙センターあんじゃないか」
「ああ、そうだったな。ミサイル危機からこつち、ほとんど飛ばしてないけど」

「やつば、『飛翔体』規制が掛かつたからかなあ」
「一機や二機、残つてないかねえ」
「そりやあるでショ、観測ロケットなんかを、しよつちゅう打ち上げてマシタ」

「じゃ、まだあるな。それ！もらつちやおう！」
「おいおい、誰が打ち上げるんだ。ロケット火花じゃないんだぞ。ここにロケットなんか分かるモンいるんか」
すると、ひとりがおずおずと手を上げた。垣崎だった。
「垣崎さん、たしかニッポン自動車だよ。ロケット分かるの」

「・・・実は、未来プラント部にまわされる前は、宇宙開発部にいたんです」

「えっ？ニッポン自動車つて、ロケット造つてたの??」
「ユーメイなハナシよ。十年くらい前にH I Hに吸収されてサ、三節重工なんかと一緒にX A J Aのグループになつたノヨ」

「じゃ、ロケット計画なら、リーダーは決まりだね」
軽やかな笑いが座を包み、話題が他に移つた。

ハナシはすべて冗談で終わるはずだった。垣崎が『同志』を連れてくるまでは。

◆ チタンリング

「渡部さん、洒落でこんなの作つてみたよ」

一人の男が鈍く光る小物を持って寄つて来た。指川義一だった。彼は以前、町工場を経営していたらしい。手の上を見ると直径二センチくらいの太い金属リングがふたつ。鎖のように連結している。

「これチタンなんだ。硬いから結構てこずつたけど、これなら文明の証だよな。こんなモノ、自然界じゃ絶対に出来っこないから」

聞けば、高校工業科の演習室を見たら工作機器があつたので試してみたという。

「ちよつと古いけど、なかなか良いマシンングセンターがあつてね、うれしくなつちやつてさ」
「はー。すごいですね。でも・・・」

それを分る高知能生物が見つ付けてくれるといいんだけど、と渡部は言いかけて、口ごもつた。先日のハナシはジョークだ。もともと異文明との遭遇など、億分の一もないことは、みんな分かっている。とはいえ、
「それ・・・ナイスアイデアだと思いますよ。うん」

「じゃ、がんばつてもう何か作ろうかかな」
「ところで材料はどこにあつたんですか？」
「病院！」

渡部は絶句した。人工関節や義手・義足だったのか、と。「だめでしよう」と咎めようとする口元を制して指川は

「もうここに外科医は居ないから、人工関節は無用の長物！義足の部品はたぶん、合わなかつたか、予備の分だろう。その人その人によつてゼンゼン違うからね」
彼はその晩の集まりでも得意げに見せて回つた。

その数日後。放射能の定例報告の後、今度は別の男が両手で包むように何かを持って渡部に歩み寄った。電機部品工場に居たという立原修。普段寡黙な男だ。

「渡部さん、こんなモン作ってみました」と名刺大の板を見せた。白くて固い、白磁の板に『きぼうの郷…ルリカケス』の文字が彫られている。

「それ、この郷のプレートのレプリカですね」

「ええ。フラインセラミクスで作りました。長い年月でもこれなら・・・」

そう、長年月を耐えるだろうが、遠い将来の遠い場所、その意味が分かる者が現れることは、絶対にはない。それでももし知的生物が手に取れば、そこで何かしらは伝わるかも知れない。いまだ解読できぬロンゴロンゴやオルメカの古代文字のように。

渡部は『フラインセラミック』に惹かれ、聞いた。

「ところで、どこで作ったんですか」

「その高校の化学実験室です。焼成に使えるような炉があったんで。ああ、材料はボクが以前務めてた電子部品の工場から取ってきました。自転車で二時間くらいのことかな」

あてもないのに、メモリアルグッズがまた一つ増えた。

「ソレってどうナノ？」ラリーが渡部を振り返ると、垣崎が答えた。

「国際宇宙ステーション軌道のはるか上。だけどまだ大気圏です。外気圏の一番下。観測衛星の打ち上げくらいなら十分だけど、空気抵抗が少しあるから、遠い将来には落ちてくる高さです」

「完全な宇宙空間って呼べるのは？」渡部が、キーワードをメモしながら尋ねる。

「高度一万kmから上かな」今度は浪花。

「そこまで行かないと宇宙にばらまけないんだ」

「そんなことないですよ。八百kmなら空気抵抗も少ないし、ここから外に打ち出せば十分、引力圏外にはいけません」

「射出するなら爆薬が必要だね」とチタンリングの指川が言う。

「せめて炸薬、と言ってください。」垣崎が苦笑いしながら言い直す。「火花のような火薬は、ロケットのモーターでは使えません」

「固体燃料は合成ゴムみたいなやつですよ」浪花が説明を引き継ぐ。「衛星の投入なら二段目には液体燃料のモーターを使うんです。姿勢制御が必要だから」

「その代わりに『サクヤク』つけて三段目を吹っ飛ばす！」ラリーが確信したように「それで完了だ！」

◆ ロケット

垣崎が次の酒席に連れてきたのは、中浦の宇宙開発研究所に居た浪花一という、五十そこそこに見える技術者だった。

「なんか面白いハナシがあると聞いたもので」自己紹介に添えたその一言に、

「なんのハナシだっけ？」とラリーがまぜ返した。

「オーパーツからオンカロのキャニスターに話移って、結局、宇宙に撒く話になった」渡部が名刺裏のメモを見ながら言う。

「そう、そうだった。宇宙にボクたちの遺品、ばらまくハナシ。で、浪花さんトコでは、多弾頭ミサイルかなんか作ってなかったの？ばらまくのに、チョウドいいんだだけど」

「そんな恐ろしいものはないですよ。兵器開発じゃないんですから。小型衛星をいくつか揃んでって、衛星軌道で打ち出す仕事はありましたけどね」

「ソレだ！で、それ、大きいロケットなの？」

「いや、ちっちゃいですよ、BB52。十mちよつどの小型ロケットです」

「それでどこまで上がるの？」

「高度八百km」浪花は得意げだ。

浪花が苦笑を浮かべながら

「遠くの星にまでなにかを運ぶなら、二段目もちゃんと加速すべきかな。三段目で搭載物が微妙な程度に散らばりながら飛んでくれるよう撃ち出す工夫しなきゃ。ノーズ・フェアリングも合わせて」

「この中にCFRPや金属の加工が出来る方いらっしゃるんでしょか？」垣崎がいうと、

「オレ、加工できると思うヨ。むかしサーフボードも作っただし、ドローンの改良にも使ったことがある。」オーパスの大津が思わぬ申し出をした。

「ほう！太田さん、その折にはどうぞよろしく」と浪花が笑う。「じゃあ、金属加工は？・・・」

渡部は先日チタンリングを思い出した。

「指川さん、金属加工できるんですね。」

指川は躊躇いながら、

「ムリだよ。金属加工って言ったって、いろいろあるんだ、部材も、工具も・・・それに大物は一人じゃできないし・・・」

すると二人が躊躇いがちに手を上げた。

「彫金してたけど、役に立たんかな」「ロケット部品、作りたいから手伝うよ」

指川が笑った。「ま、まだ妄想の段階だから」

渡部は、『高々度射出』と書いたカードの下に『BB5

2ー・八〇〇km』『二段目―ブタジエン合成燃料・
『フェアリング―CFRP―大津』『勘合部―金属加
工―指川』と書き留めたカードを並べた。

垣崎が息吸ってから、ゆっくり一同を見回した。

「それで、ロケットのターゲットはどこですか？」

「よその星！」出席者の中から誰かがおどけたように言う。

「それはそうでしょうけど。木星とか土星とか、衛星に生
命が居そうな星ですか」

すると意外な人物が落ち着いた声でゆっくり話し始めた。
普段あまり人と交わらず少々気むずかしいと思われている
埴原俊一だ。

「たとえば木星の衛星エウロパと土星の衛星エンケラドス
どちらにも海はあるようだが、おそらく惑星の引力が全て
のエネルギー源だ。太陽からの距離が遠すぎて、おそらく
表面を覆う氷の摩擦だけが熱源、その下の海はアンモニ
ア。我々のメッセージを受け取るような高等生命への進化
はとても難しいだろう」

渡部は、埴原が大学勤めだったことを思い出した。なに
学部でどんな研究・教育をしていたかまでは誰も知らない。
「太陽系外を狙うとしたら、オレたちの銀河系の中？
外？」と誰かが聞いた。

「おとなりのアンドロメダ銀河までは二四〇万光年もある
んです。われらが天の川銀河でいいと思いますヨ。」と浪

花。

「ウチらの銀河も中心部分の方が圧倒的に星が多いんだっ
てね。混み合ってる方がキャッチされやすいかもヨ」ラリ
ーが後追すると、

「天の川銀河の半径がおおよそ五万光年くらい。ウチらの
太陽系はそのほぼまん中くらいで、中心まで約二万六千光
年。二万光年ほど飛ばせば星の密度が高い『バルジ』に突
入！ですワ」と浪花。

「二万年も飛ぶのか」渡部が思わずもらす。

「いえ。光速で二万年ですから、光速三〇kmでも二億年
ですね」とこともなげに垣崎が答える。

「たしか拳銃の弾は時速一五〇〇kmで、ライフルはその
倍くらいだったかな」と、自称「ちよっぴり軍事オタク」
でもあるラリーが蘊蓄を披露する。

「するとライフルでも秒速一kmもないですな。地上から
の速度がそのレベルだったらそもそも太陽の重力を振り切
れない。でもロケットは加速しながら飛んで行くんで」と
浪花。「高度八〇kmまで加速上昇して、そこから打ち
出して毎秒二〇kmに達したとすれば、たった三億年です
ヨ」

「なっがーい旅ですね。地球で三億年前っていうと、なに
してました？」藍沢が妙な聞き方をしたが。

「まだ恐竜も現れてない」と埴原は笑いもしない。

「こりや大変なプロジェクトだな。ちゃんと組織つくって、
リーダー置かないと」
「だれがリーダー？」
立原が手を上げた。

「立原さん、あんたやってくれるの？」と指原。
「いえ」と彼は立ち上がり、渡部の前のテーブルを指さし
た。そこにはキーワードやキーコンセプトを記した紙片が、
トランプ占いのように並んでいた。

「渡部さん、それKJ法じゃないですか？」
それはもう半世紀も前に考案され、全国に広まった古典
的な情報の整理・系統化手法だ。

「おお『発想法』、なつかしいね」「KJカードってあっ
たなあ！」七十歳代からはそんな声ももれた。柿崎が渡部
を見据えた。

「渡部さん。プロジェクト・リーダーお願いします」
これが三ヶ月前の出来事だった。

◆ コクーン

ロケットのチームが動き出してほぼ一月経った六月。い
つしかこのプロジェクトに『きぼう計画』の名が付いて、
報告会も『地球遺産会議』と呼ばれるようになっていた。
その会で、大きな方針転換があった。ロケット第二段の
固定燃料化と第三段の射出機構案が報告された後の、雑談

「ねえ、なんか、本当に出来そうな気がしてきません
か？」藍沢がいうと、

「なんか、やる気が出てきました」立原までも口にする。

「そう、ちゃんと計画立てて、出来ることまでやってみよ
うよ」

「おう」何人かが賛同した。

で、ラリーが漏らした一言だった。

「どこかに文明があるとイイネ。いくら記念品を送っても、受け取るヒトがいなけりゃ、ブタに真珠、ネコに小判、タコにごはん・・・あはは・・・」

下手なジョークが、プロジェクトの痛い脇腹を突いた。

一同の瞬間の沈黙の後、藍沢が言った。

「じゃあ、私たちが『いのちの素』を撒いたらいいんじゃないですか？」

にやっと笑ってラリーが呟いた。

「パンスパーミア？」

「なんですか、それ？」立原が聞くと、

「パンは汎、スパームは精子。我々の生命は、宇宙に拡散した『生命の源』から生まれた、という考えだ。生命の起源について議論が盛んだった二十世紀初頭の一説だ」埴原が解説した。

生命発生を地球外に求めるこの説はその後、オペリンらの実験もあって、「地球上発生」説に圧倒された。それでも宇宙を浮遊する『生命の種』を求める研究はその後もさまざまな形で続き、アミノ酸などの有機物が宇宙で見つかった。

「私たちも、地球上の生命の遺産をパッケージにして、宇宙に撒きましょう」

突然、製薬会社に勤めていたという間宮しげみが静かに

間宮が戸惑うように

「バクテリアやカビならともかく、三億年も宇宙を旅して生きてる動物って・・・？」

「宇宙では低温維持が容易ですから、冬眠状態にはできるかも」と浪花。すると藍沢が意外な知識を披露した。

「クマムシは乾眠状態になると、真空や放射線、絶対零度にも耐えて、一〇〇年以上たっても蘇生するそうですか？」

「地上で最もたくましいと言われる微小な動物だな。超深海から温泉の中にまで生息している」と埴原が補足説明する。

「どんな動物？」は指川。

「一ミリのイモムシ、っていう感じです」

「詳しいね」

「わたし、看護師になる前、某私大で生物学を学んでたんです」

ほう、と数人が声にした。

「だが、蘇生したあと元の通りに生存できるか、生殖までできるかどうか、は不明なはずだ」と埴原。

「だいたい、イモムシ進化して、文明まで持てるかなあ？」

ラリーの疑問に藍沢が答えた、

「クマムシには驚きの特殊能力があるんです」

立ち上がり、力を込めてそう言った。刹那、場の一同に戸惑いが広がった。メモリープレートを宇宙に撒くだけでも無茶な企てなのに、さらに桁違いの困難を生むような話に思えたからだ。

「まあ、まずその可能性について、話してみませんか」渡部が間宮の思いを掬った。

立原がこれを繋ぐ。

「えーと。で、地球生命の誕生ってどんな具合でしたっけ」

「生命の誕生は、地球誕生から七億年、地殻構造がほぼ定まってからなら二億年、雷や隕石などでもたらされた有機物が海の底に溜まり、海底火山のエネルギーが作用して、有機化合物同士の必然的な結合と反応が始まった。そこから偶然、自己増殖する物体が生まれた。ざっと三十九億年前の出来事と推測されている」埴原の解説は簡潔だった。

「ソコから始めるの？うひゃあ、またまた長い道のりだなア」とラリー。「もつと早められないカナ？」

「われわれの細胞のような真核生物の登場は二十二億年前。多細胞生物の登場は推定十二億年前、六億年前ころから多様な生物が出現しはじめた」

埴原の説明を遮って、藍沢が尋ねた。

「現人類の出現は二〇〇万年前でしたっけ？せめてその、進化の爆発、六億年前からくらいになりませんか」

「特殊能力？」

「外部からDNAを取り込む能力です。彼らの細胞は、細菌や植物の遺伝子まで取り込んでいて、権威ある米国誌にも載ってるそうです」

「それはスゴイ！進化のポテンシャル、半端ない。ボクの遺伝子も入れたい！」

ラリーの感嘆に、浪花が

「結婚したら？」

みんな爆笑した。

「でも、イモムシが進化しても、チョウチョになるのがセキの山ダヨ。進化の可能性を考えるなら、もつと原始的な生命がいいんじゃないノ？」

「ミドリムシとか？」この間宮の提案に、藍沢が答えた。

「ユーグレナはいいかも。光合成で自活できるし」

「それには光がなきゃダメだ。それに独立栄養の生物が高等動物になるとは思えん」と埴原。自ら有機物を作る独立栄養生物は、他者に依存しない。

「植物系に進化するのかな。やつぱり従属栄養者の方が餌をとるために感覚器が進化するでしょうね」と間宮。

「それに、一個の細胞で妙に出来上がってるヤツは進化しなそうだな」と浪花。

「多細胞化しなければ進化はない。だが、地球でも多細胞化が始まったのは、生命誕生から十億年以上経ってから

だ」と埴原。

「そこを早めましょう。ボルボックスみたいな原始的なレベルからかなら・・・」

「それは植物の祖先でしょう」

「でも、多細胞化のきっかけみたいな、増殖細胞の塊でできる遺伝子があれば」

藍沢と間宮の掛け合いに、大津が割り込んだ。

「どつちにせよ、動物の祖先が生きたためには、たくさん植物が必要なんじゃない？エサが続かなきゃ生き続けられないんだし」

埴原が補足する。

「そもそも植物が増えないと酸素ができない。酸素がないと我々を引き継ぐ生命体はできない。無酸素では代謝効率が悪く、動物の進化は遅いだろう」

大津がいう。

「オレたちの、というかオレの細胞を直接遺せないかな」

すると間宮が、

「それはムリです。まず生きていけません。栄養の整った培養液で大事・大事にしてないと、すぐ死んじゃいますから」

「免疫細胞の中に、バクテリアやがん細胞食べるノいたヨネえ。アレでもだめかな」

「そりゃ体内の環境あつてのことです。餌だつて、『ココ

です』マークがないと分かりません。元来はは敵・味方の識別マークですけど」

「自分以外、みんな『敵』なんて考えたら、生殖できないネ」とラリー。

「はは・・・、オレ、だから結婚できなかったんかな」と大津。

「ジブンで増殖するしかないネ！」

「単為生殖する微生物だつて、時々他と遺伝子交換をしますよ。でないと、種の保存ができません」と藍沢。

「じゃあさ、バクテリアでもなんでもいいから、われわれ人類からの遺伝遺産は入れられないかな」大津がいうと間宮が答えた。

「染色体四十六本分は荷物が多すぎです！」

「一部だけ遺産として切り出すとしたら、何処だろうね」と指川。

「切り出してどうするの」と大津。

「しぶとく生きられるような微生物に託すのさ」

「ホモ属のサピエンス(智恵)遺伝子？」と藍沢が聞く

「そりゃむりだ。知恵なんて五個や一〇個の遺伝子でどうにかなるもんじゃない」と埴原。藍沢があきらめきれずに食いだがる。

「神経細胞の発達に関係した遺伝子があります」

「中枢神経の遺伝子も、他の多くの遺伝子があつてこそ意

味を持つ。下等生物レベルの神経発達だったらクマムシが持つている」

「どんな遺伝子をいれても、原始生物にとってメリットが無いと、厳しい進化の生存競争で捨てられちゃうヨ」とラリー。

「進化の過程では遺伝子の重複と変異が必要な『事件』だ。」と埴原は続けた。「組み替えには動き回る遺伝子、トランスポゾンの働きが大きい。また外部からの遺伝子導入を考えるなら、ベクターとなるウイルスの存在も不可欠だ。『贈り物』にはこれらを入れるべきだろう」埴原が進化の条件を加えたが、大方の者には伝わらず、議論が冷めてきた。そこで渡部がまともに入る。

「では欲張った妥協案。クマムシ君に期待しつつ、そのエサにもなる動物物代表のミドリムシを共存させ、死んだ細胞を分解するようなバクテリアも入れる。そしてこれらに『邪魔にならない範囲で』人類の贈り物遺伝子を組み込んだウイルスを植える。そして全てを栄養スープとパッケージにして宇宙に放散する。これば良いですか？」渡部が皆に問うた。

「そうですね。植物と動物の命のタネ、どっちも生息できるミニ環境ができればいいんですよ」と藍沢。

「送り込む、たつてどこへ？　まずは水のある惑星じゃなきゃダメでショウ？」とラリー。「それに運よく液体の水

がある星に落ちて、そこにどんな毒が溶けてるか分からナイ」

「コクーン作って送り込んだら？」間宮が言うと、
「繭(まゆ)、だね」と渡部。「でもどのくらいの大きさがいいんでしょうね？それに、その中で何年クマムシ達は生息できるんでしょう？」埴原に向き直つて、「ロケットに積める重さはどれくらいでしたっけ？」

「B B 5 2 ロケットのペイロード(積載量)は百五〇キログラム。容量は二立米弱です」

「百個積むなら一個一・五キログ。牛乳パッケ一・五個分か」

「そんな容量じゃ、均衡が難しい。とても何年も保たない」と埴原。

「あのおさ、どうせ水が無けりゃ生命が進化できないんですよ？だったら、水があるところに落ちた時、ちょうど良くなるようにすればいいんじゃない？」大津が言った。

「水は現地調達か。なかに必要な栄養塩を詰めておいて、着水後に浸透圧で膨らむ仕掛けにすればいいんだ」と浪花。「ビー玉くらいか、せめてソフトボールくらいになったらいいな。一杯積める。」

「でも、無限に薄まってたら、ミネラル分なんか外に逃げちゃうぜ」は浪花の危惧だ。

「ある程度水吸って大きくなったら、固まって膜が出来る

ようなのがいいな」藍沢だ。

「あ、それ、できる思う」これまで余り議論に参加しなかった男が小さく手を上げた。楊潤信。大陸から来た学生だというが、年は三十を超えているように見える。

「単なる浸透膜の袋じゃないですよ」

「ええ。柔らかい容れモノ、すこしすこしに膨らんで、その間、すこしすこし硬化していつて、ある大きさに硬くなる」

「そう、その通りです」

「そんな性質の水和ポリマーで作ります」

「でも、その先、何万年もそのままだと進化した生物はそこから出られない」

「それに、その星の外部環境に簡単に適応できないよね」

「じゃあ、何億年かかけて徐々に外部環境を取り込みながら、じわじわ壊れていけばいいんだ」

「そういうこと」

「はは、だいじょうぶヨ。そんなに保つポリマーなんて、できないカラ」

「それよりさ。だいたいそんなボール、よその星の大気圏突入の時、高温で燃えちまわないかね？」指原の指摘はもつともだった。

渡部の脳裏に、セラミックの「きぼうの郷」プレートが浮かんだ。

「立原さん。ファインセラミック、焼成できますよね。それでカプセル出来ませんか？」

「出来ないことはないと思います」

「何度までいけますか？」

「二千度まで大丈夫ですよ」

「おおつ、なんかいいけそう……。だけど、肝心な『いのちのタネ』。面倒な適任微生物探しや遺伝子導入なんて、だれがどこでやるの。やれる人は？」

藍沢と間宮が名乗りを上げた。

「わたし、卒論でもやったから、細胞培養なら自信あります」

「いちおうこれでもクスリ屋の開発にいたから、やれませう」

かくして埴原の指示で高校の生物学実験室に手作りのクリーンベンチが設置され、うち捨てられた製薬会社の研究室から頂戴した、必要な機器と薬品が並べられた。偉大な地球遺産計画のために。

◆ 打ち上げ

気圧一〇二二ヘクトパスカル、気温二四度、湿度五一％、南の風、風速〇・九、薄曇り。薄い天幕に覆われながらも、今日は太陽の輪郭が見える。かすかに空の青さえ伺える晴天だ。

ルリカケスの住人は、二人の留守番を残して動ける者全員、マイクロバスやバイクでこの岬までやって来た。夜間にセットした、たかだか一〇mほどのロケットは、三階建てのビルの大柄ではない。数十m離れた研究棟の方が堂々と見え、肝心の主役は少々頼りない。もつと近くに寄ってもよさそうなものだが、やはり火薬の塊だ。安全のためには皆は小さな入り江の反対側に陣取った。

今日の日を迎えるまでにはいくつもの壁があった。電力、資材、部材の確保には全員が走り回った。計画が『当局』に漏れ、阻止されそうになった。撃墜されるおそれがあった。軌道は修正した。培養用の薬品や機材確保と純水の入手には苦労した。自分の白血病の細胞を、という訴えもあって苦悩した。それら全てを乗り越えて、今日がある。

完

「打ち上げ五分前」アナウンスが響く。

「いよいよだなあ」それまでピクニック気分でガヤついていた皆の言葉数が急に少なくなる。

【三〇秒前】

皆が唾をのみ込む。そして息をこらす。

『一〇・九・八・七・六・五・四・三』

【メインエンジン点火】

『二・三・四・五・六・七・八・九』

『まだまだ……』

【本編はすべてフィクションであり、登場する国・団体・人物等は全て架空のものです。】